100号記念特集

「同窓会だより」100号台に突入
母校愛、連帯の歴史連綿と

それはまさに同窓会の宿願と熱意がほとばしった渾身の誌面であった。1975（昭和50）年12月8日に発行された「秋高同窓会だより」創刊号のことである。

1面トップに「機関誌発行を期に　高まる連帯感」の見出しが躍る。同窓会長、学校長、事務長の挨拶が続き、恩師の近況、学校行事や部活動、進学状況、コラム「天上天下」などが小さな文字でびっしりと誌面を埋めつくしている。2面以降も運動部の活躍、つどい、続々と集まる寄贈図書一覧、随想、文芸、慶祝、哀悼、お知らせ、協賛広告と盛りだくさんの内容だ。随想には小畑勇二郎秋田県知事（当時・大正13卒）の名前も見える。

蓼沼銀治郎会長（当時・大正8卒）は冒頭の挨拶の中で、「母校創立百二周年目を迎えて、『同窓会だより』を発行することになった。昭和四十七年まで出ていた雑誌型式の『同窓会報』『矢留』『同窓会ニュース』『同窓会だより』の流れを受けつぐものとして、会員各位に待望された機関誌である」と述べ、こう言葉を継いでいる。

「同窓会とは、世俗の利害を超えた純粋な敬愛と友情のつどいであろう。―中略―われわれは渾然一体となって切磋琢磨すると共に、百周年の時の盛り上がりに劣らぬくらい同窓会活動を充実させて、母校の限りない発展を祈ろうではないか」

念願の機関誌発行にこぎ着けた喜びと興奮が伝わるとともに、「秋高同窓会だより」定期発行の機運が、1973（昭和48）年の母校創立100周年を契機に盛り上がった様子がうかがわれる。

同窓会だよりの編集体制は、小西達四郎委員長（大正12卒）をはじめとする4人の同窓会側編集委員と誌面作成の実務を担った母校勤務の教師で同窓会員の一関吉美氏（昭和14卒）ら6人の学校側編集委員とでスタートした。

宿願だった機関誌発行

編集作業といっても、そもそも同窓会のための専用スペースがあったわけではなく、学校の職員室や事務室、図書室の一角、小体育館会議室などを転々と渡り歩くジプシー生活を余儀なくされたのが実態であった。

1985（昭和60）年に組織変更があり、企画、財政、名簿、広報の4常置委員会が発足した。同窓会だよりは同窓会側編集委員を主体とする広報委員会の所掌となったが、ジプシー生活はなおしばらく続き、自前の会議室で編集作業ができるようになるには1993（平成5）年、120周年記念事業として建設した校史資料館「羽城館」の完成を待たなければならなかった。同窓会事務局が羽城館1階にようやく安住の地を求めたのはこの時であり、当初は事務局長以下3人の常駐体制で業務に当たった。

同窓会だよりは創刊から41年で100号の節目を迎えた。この間用紙サイズやページ数が変わり、印刷スタイルも数回の変遷を重ねてきた。特に2014年の第95号から全面カラー印刷に切り替わったのを機に、題字もやや身内感が漂う「秋高同窓会だより」から内外に発信する力強さを込めて「秋田高校同窓会だより」に変更した。しかし、編集の根底を流れる母校愛と連帯の系譜は一貫して変わりがない。

1995（平成7）年から同窓会だよりは、住所が判明している全国2万2千人に及ぶ全ての会員に郵送されるようになった。第100号までの道のりは決して平坦ではなかったが、原野の地平を切り開いた先達から今日に至るまで、唇歯輔車とも言うべき同窓会と学校との紐帯にはいささかの揺るぎもない。同窓各位の温かいご理解、ご支援を支えに同窓会だよりは新たなステージへと向かう。

菊地司法書士事務所
司法書士
菊　地　喜久雄
（昭和52年卒）
〒010-0951
秋田市山王六丁目1-1（山王ビル）
TEL 018-823-9381
FAX 018-823-3209
superman-kikuchi@nifty.com
http://www.kikuchi-shiho.jp

Sano PHARMACY 佐野藥局
秋田市保戸野通町3-31
株式会社サノ・ファーマシー
代表取締役
佐野　元彦（昭和49年卒）
取締役副社長
佐野　克彦（昭和59年卒）
取締役
佐野まり子（昭和45年卒）

呼吸器科・アレルギー科・内科
たわらや内科
院長 俵谷幸蔵
（昭和42年卒）
●月・火・水・金曜/午前8:30～12:30　午後2:30～6:00
●木・土 曜/午前8:30～12:30
●休　　診/日曜・祝日
秋田市東通館ノ越8-11　TEL018-884-7110

大淵歯科醫院
本校学校歯科医
大淵義孝
（昭和42年卒）
〒010-0001
秋田市中通4丁目7-35
秋田市民市場 2F　北西角